

## はじめに

7月に新しく AAFC 会員に加えて頂いた穴田と申します。慣例によりつれづれの記を、とご案内を頂きましたので、皆様にご披露する様な内容でもありませんが、私の少年時代からのオーディオとの関わりを書かせていただきます。

## その1. ♪月の沙漠と蓄音機



京都の北に位置する田舎町の農家に末っ子として生まれた私は、機械モノや電器モノに異常な興味を示す子供として育った。物心が付く頃には、家の工具箱からドライバーやペンチなどの工具を持ち出して、子供の知恵で分解できるモノは何でも分解した。流石に高価そうな物で元に戻せないような物には本能的に手を出さなかったが、時には壊したことがバレて家族の怒りを買ったりもした。

実家には生まれる前から蓄音機があった。当時あった蓄音機の形状は、上にホーンラックがあるタイプではなく、本体の前面に観音開きの扉があって、それを左右に開くと、サウンドボックスからホーンを通過して本体内部の木製のホーンと繋がって観音開きの開口部から音が放出される仕組みだった。

SP版のレコードが30枚ほど別の専用ケースに入っており、そこから1枚引っ張り出して蓄音機にかけた。謡曲や軍歌や童謡など様々な種類のレコード盤があったと記憶しているが、もとよりそれらの内容にはたいした興味も無く、ただそれらのレコード盤をターンテーブルに置いて、手巻きのゼンマイモーターを巻いて、ターンテーブルの回転が始まり、ピックアップを盤の上に置くと、音が出る仕組みが随分気に入った。



中に1枚の童謡のレコード盤があって、その中の1曲に「月の沙漠」があった。加藤まさお（作詞）、佐々木すぐる（作曲）のあの有名な童謡である。童謡とは言うけれど、子供の私には、その歌詞が意味するところはちっとも理解できなかった。ただそのゆったりした短調の曲調とエキゾチックでどこか哀愁のあるメロディーが、子供心に印象深く、何度も何度もそのレコード盤を聞くうちに、その夢のような世界に引き込まれた。

蓄音機という機械について当時の自分が不思議に思ったのは、ゼンマイモーターの回転がターンテーブルに歯車で伝わり回転させることは分かるが、どうして一定の回転数が保たれるのかという疑問だった。これを究明するため、蓄音機の本体からターンテーブルの機械部分を持ち上げ、メカニズムの部分を何度も検分し、中に分銅の様な重りが対角線状に付いた回転子があることが分かった。そしてターンテーブルの回転調整用の

レバーを動かすと、その回転子が少し左右に振れて、回転数が変わるような仕組みが見て取れた。それが调速機（ガバナー）という偉大なメカニズムであることを知ったのはずっと後であるが、调速機の原理はエンジンの回転速度を一定に保つためにキャブレターの開け閉めの自動調節に使われるなど、多くの機械にその応用がされていることを知る。

かくして、実家の蓄音機は、メカニズムの分解という儀式に遭い、遂に犠牲になった。その後実家の蓄音機からレコード盤の音が聞こえることは途絶えた。

※画像 1：実家にあったものに近い形状の蓄音機

※画像 2：レコードジャケットのイメージ 元々の SP 盤の入ったジャケットではなく、月の沙漠を収録した多分 LP 盤のジャケットを引用

## その 2. ラジオ少年

世の中は戦後の景気回復とともに工業化が進展し、高度経済成長が始まる前夜ではあったが自動車や昭和家電が次々と市場に投入される時代だった。産業といっても農林業が中心の京都の故郷にもこの波が押し寄せ、音の世界ではラジオから発展してレコード再生専用のポータブル電蓄、ステレオ、真空管アンプによるオーディオ装置が趣味人の間で流行りだした。

この時代の少年はまずは鉱石ラジオからこの階段を上り始める。当時、「子供の科学」という雑誌があり、Wikipedia によるとこの子供向け科学雑誌は大正 13 年に創刊してから現在まで発刊が続く 96 年の歴史ある科学雑誌で、日本の少年達の科学探究心を育成し、大袈裟に評価すれば日本の工業化を支えた多くの技術者を生み出す源となった。田舎生まれの少年であったが、小学校に上がる頃から、何故かこの雑誌を親が購読させてくれたので、分解好きで工作好きの少年は、この雑誌に啓蒙され雑誌に載っている工作は、自分で材料が調達できるものは片端から製作を試みた。電波に乗って空中を飛び交うラジオ波を受信し、復調して音声信号を再生する最も原始的な装置が鉱石ラジオである。蜘蛛の巣状にコイルを巻いたアンテナを作成して、少しでも感度を上げるため様々な実験や工夫をした。上手く周波数が合うと、クリスタルイヤホンを通して人の声や音楽がはっきりと聞こえる。子供だから昼間遊んで（学校も行きましたが）疲れて夜はすぐに寝付くものなのに、布団を被って遅くまでその鉱石ラジオから聞こえるラジオ番組の音楽を夢うつつの中で聴いていた。



小学校の 3、4 年生の頃には、我が家にも白黒テレビが入り、歌謡番組やポピュラー音楽、初期のアニメ主題歌など、多様な音楽をお茶の間に運んだ。映像と音声が一体的に提供される TV 文化は、現代のインターネットと同じように圧倒的な情報量で日常生活を変えていった。一方で音楽をまともな音で再生する方法は、当時のアマチュアにはレコード再生が主流で、あらゆるジャンルで多くのレコード盤（ビニール／ヴァイナル）が発売された。（FM 放送の受信という方法もありましたが）

私は、鉱石ラジオから真空管を使った並三ラジオ、5 球スーパーなどの製作に進んだが、

本来はもっと奥深いハム（アマチュア無線）の世界には行かず、やがてラジオの製作を卒業し当然の流れでオーディオの方に傾倒して行った。

当時の印象深い音楽としては、大量のポピュラー音楽が海外から入って来る中でも特にストリングスの美しいメロディーに惹かれた。中でもパーシーフェース楽団の「夏の日の恋」など、まだ恋など知らない少年が、そのシネマの世界に憧れた。

京都市内に居を構えた叔父がオートバイの技術屋を仕事にしながらオーディオ趣味を持っていた関係で、実家に来たときには何やら真空管アンプの設計など色々教えてくれた。当時の私にとっては大きすぎるスピーカーキャビネットを持ってきてくれたりと何かと世話を焼いてくれ、私のオーディオ熱を後押ししてくれた。



地元の高校に入る頃には、同級の間でオーディオ趣味を持つ変わった学生として知られるところとなり、色々な意味で私の恩師になる英語の先生で担任だった S 先生が実家まで私のオーディオ装置（まあ今思えばガラクタの寄せ集めでしたが）の見学に見えたこともあった。またその先生が K 大同期の友人に製作して貰った真空管アンプのハム（ブーンという雑音）がどうしても消えないというのを何とか直してあげて面目躍如、それなりに趣味も役に立った。その S 先生がお礼

に食べさせてくれたイチゴミルク（当時田舎ではこういうイチゴの食べ方はとてもモダンだった）を食べながら先生の下宿で聴いた、ベートーベンの交響曲 6 番「田園」は、私の耳にはとても新鮮で、中学の音楽の授業で聞かされた印象とは大いに異なり、以来クラシック音楽が少し身近な音楽と思えるようになった。

※画像 1：「夏の日の恋」の映画シーンをジャケットにしたレコード

パーシーフェースのレコードは数多く発売されています

※画像 2：カールベーム指揮ウィーンフィル「田園」（1971 年 5 月の録音）

先生の下宿で 50 数年前に聴いた盤がこれだったかどうかは不明（私の好みで選択）

### その 3. クラリネットとの出会い



高校は地元の高校に入ったが、高校生になると何かサークル（クラブ）活動をするのが普通だったから、自分も何かと思ったが、元々運動系は得意ではなかったのでオーディオの趣味から必然的に音楽の方に惹かれた。かといって当時の母校には音楽と言ってもコーラス部かブラスバンド、それも S 先生が赴任してから出来た 2 年しか歴史が無いブラスバンドだった。楽器がやりたかったから、ブラスバンドになったが、10 人そこそこの部員で最低限の楽器構成のバンドであったから、楽器は不足しているパートの楽器が強制的に

割り振られた。それが私の場合はクラリネットだった。

ブラスバンドにおいては、クラリネットはオーケストラの第一バイオリンパートに相当し、楽曲の主旋律を担当することが多い。コンサートマスターに相当するバンドマスターもクラ



リネットの第一奏者が務める。だからクラリネットを担当すると部活が結構忙しい。自分の楽器練習だけではなく、バンド全体を率いる役目もこなさなくてはならない。

楽曲は主に行進曲や小編成バンドでも面白く演奏できる J・シュトラウスなどブラスバンド用に編曲されたものが中心だったが、何分歴史が無いのと、個々の奏者が初めてその楽器を始めた者が多いから、まともな音が出るまでが一苦勞で、バンドのハーモニーは二の次であった。

それでも1年ほど経つと譜面も読めるようになり、何とか楽器もこなせる様になって、学校の文化祭や、運動クラブの壮行会、高校野球の地区選抜試合のスタンド応援団のバンドとしてかり出され、それなりに活動の場があった。

S先生の伝手で、市内のO高校のブラスバンドの指導に当たっていたクラリネットの先生に指導をしてもらったり、自分の楽器を購入する時に知り合いの楽器店に交渉してもらったり、S先生には音楽の基本から楽しみ方まで、その後の人生に残る糧（道楽も糧とみてですが）を与えてもらった。

母校のブラスバンドは入学して参加した時には10数名の団員だったが、徐々に増え卒業する頃には25名ほどになっていたので、最低限の楽器構成で演奏できるレパートリーも増えた。卒業するまでには全国高校吹奏楽コンクールなどとても出られるレベルにはならなかったが、その後私が大学生の間に、コンクールの地区選に出るまでになっていた。

高校生の時代は、オーディオの方はそこそこで大きな発展は無く、日常生活はブラスバンドの部活が主体となり、クラリネットという楽器の演奏を通して音楽の深淵（と言うにはまだまだ遠かったと思われませんが）にはまり込んで行った時期だった。

※画像1：クラリネットのパテストリー No music, No life. とあります

※画像2：J・シュトラウス＝ラデツキー行進曲のブラスバンド編成譜面の例

これは総譜と言って、楽器毎の楽譜が1ページに収められた指揮者用の楽譜です

#### その4. 夜の窓と鳥類図鑑

ブラスバンドの部活が生活の大半を占めた高校時代、三年生で進路は大学進学としたが、田舎町の高校で進学希望しても入れる大学はなかなか無く、必然的に浪人に。実家は決して裕福ではなかったが、市内に出してもらって予備校の寮に入った。浪人ではあったが田舎町の生活環境から抜け出し、街の生活になったことは精神的に大きな開放感があった。その年の夏頃までは、そんな開放感を味わいながら、予備校半分、音楽喫茶店回り半分のような生活を過ごした。

その頃良く通った京都市河原町（かわらまち）界隈の音楽（クラシック）喫茶とジャズ喫茶が「夜の窓」と「鳥類図鑑」である。

夜の窓は音楽喫茶と銘打っていた訳でもなく、当時のオーディオ装置をはっきり確認した訳でもなかったが、洋館造りのその店内は噴水のある庭を囲んで回廊の様に客室が配置され、

その庭を正面に見る店内の厨房を背に暖炉が切っており、その両側に大型のスピーカーシステム（音のイメージから想像すると多分タンノイ=G.R.F.）が配置されていた。左右の回廊に音が共鳴して一種ホールで演奏を聴く錯覚があり、席が空いているときはいつもスピーカーを正面にして庭に面したテーブルに座り、一杯のコーヒーかその頃良く飲んだロシアンティーで何時間も過ごした。曲はリクエストする訳でもなく、流されるままだが、当時は当然ながら CD は無く、全て LP レコードの再生だったから、あまたこれかなど、馴染みの演奏が聞けると嬉しかった。良く掛かっていたのは店主の好みかベートーベン、シューマン、シューベルトなどロマン派の曲が多かった様に記憶している。



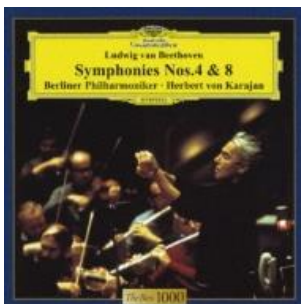
JAZZ 喫茶にもよく行った。一番通ったのは現在も営業する「鳥類図鑑」という京都では有名な JAZZ 喫茶だが、名前が特徴的で何かマニアックなイメージがたまらない。ここに来ると、さあ貴方は JAZZ を聞きに来ましたね、と襟を正さなければならなくなり、興味本位でリクエストなど出来ず、掛かっている曲（レコード）には敬意を表さねばならなかった。1971年（または1972年）開店ということだから、私が通った頃はまだ開店1~2年の頃だったんですね。装置は良く覚えていないが、こちらは矢張り JBL の音だった様なイメージがある。（近年は何でもネットで検索できるので、調べて見ると当時からやはり JBL で途中からあのパラゴンとのこと）掛かっている曲

やリクエスト曲は、50年代、60年代が多く、ここで聞いたブルーノートレーベルの曲は、その後自分のコレクションにも入れたものが多い。

秋風を感じるころから受験勉強のスイッチが入り何とか、第二志望の大学に合格して、私の浪人生活は終わった。さすらいの浪人時代、しかしこの一年の間に得た音楽の糧は決して少なくはなかった。（第一志望に行けなかった負け惜しみです）

※画像1：喫茶「夜の窓」のマッチ箱の図柄 洋館建ての店の正面のイメージが懐かしい  
※画像2：JAZZ 喫茶「鳥類図鑑」のマッチ箱の図柄（表・裏） この何とも独特なデザインが忘れられない 室内の正面の壁には蝶の標本が一面に飾られていた

## その5. 再びクラリネット



予備校は一年で何とか卒業し京都を離れN県のS大に入学した。大学紛争の嵐がようやく収まった年の入学だったので、入学式が1ヶ月ほど遅れた。専攻は理系の数学だったから、比較的のんびりとした学生生活の始まりだった。大学のサークル活動は高校時代とは異なり、選択肢は随分とあったが、1年間お蔵入りにしていたもの矢張りクラリネットをまたやりたくなり、余り迷うことなくオーケストラに入った。私が入団した頃は結成されてまだ10数年の学生

オーケストラだったが、毎年定期演奏会を催し、それまで経験したブラスバンドの楽団とは異なり大所帯で様々な音楽経歴を持つ先輩達が楽団を運営していた。オーケストラのクラ

リネット奏者として、要求される技能の習得もあったが、団員としての活動は学生生活の大半を占めるようになった。そんなことで大学には5年居たが、内3年間はほぼ部活で過ごし残り2年で殆どの専攻単位を取得して卒業した。

このオーケストラの定期演奏会を4回経験したが、幾つかの印象深い演奏の1つはベートーベンの交響曲第8番である。この交響曲の第3楽章にクラリネットとホルンの掛け合いの長い小節があり、その美しい旋律は今でも空で覚えている。クラリネットが出せる音域の最もハイトーンで終わるので難易度もあるが、一度練習の時にその音を外してしまい、一緒に身振りしていた指揮者がずっこけたという笑い話も印象に残っているが、ステージ本番でなくてよかった。

指揮者も一年経験した。もとより指揮法など専門に勉強したことはなく、先輩指揮者や客演指揮者を見よ見まねで自分なりに振り付けを考えるのであるが、自分の演奏パートの楽譜しか通常は見ないところ、指揮者はオーケストラ全体を見るので、オーケストラ譜を読まなくてはならない。これはそう簡単に身につくものではないが、それでも全部の楽器パートが折り重なって曲を進行させ、オーケストラを指揮する面白さの一端を経験した。初めてステージで指揮したのはロッシーニの「セビリアの理髪師・序曲」で、何故この曲になったのかは覚えていないが、緊張もしたがこの曲の面白さを十分楽しむことができた。



今年の5月にこの学生オーケストラの定期演奏会にN市まで行ってきた。第111回目の定期演奏会で、行くのは実に半世紀振り。自分たちの時代とは何もかもスケールアップしているけれど、学生オケらしい若々しさと歴史を感じさせる音の厚みがあり、半世紀を隔てても何

か分からないけれど、音楽という絆で繋がっているのを感じられて嬉しかった。(多分こちらの片想いですね、これは)

※画像1：ベートーベン交響曲第4番、第8番 カラヤン＝ベルリンフィル

※画像2：ロッシーニ序曲集 リッカルド・シャイー＝ナショナル・フィルハーモニー

## その6. 失われた音を求めて

オーケストラ活動で明け暮れた大学生活も終わりを告げ、社会人となった。仕事はコンピュータを選んだ。会社があったI県に移り住み、結婚し子供も二人でき家庭人となったがその後仕事が忙しくなり、音楽もオーディオも日常生活の中に埋没した。実に40年近くも、そういう生活が続いたが、還暦を迎える頃から仕事も一段落したこともあり、高校時代のオーディオ熱が再燃した。残念ながらクラリネットの演奏はもう出来ないが、音楽を自分オリジナルのオーディオで楽しむことが生きがいとして戻ってきた。

当時のように真空管アンプを製作し、音に自信が持てるものが出来ると、欲しい人にオークションなどで譲るという生活が10年ほど続いている。最近、テレビの音楽番組(録画できるから便利です)をオーディオ装置で再生したり、ネットの新しい音楽ソースを分野問わずダウンロードしてライブラリを作成したりして楽しんでいます。(便利な時代です)

5年ほど前に亡くなられた真空管アンプビルダーの佐久間翁の営むレストラン(兼工房)「コンコルド」を千葉房総の館山に訪ね、会話の言葉数は多くはなかったが、その神髄(音楽を愛し音を追い求める)に東の間触れ、これからの私の目標になっています。(おわり)



佐久間 駿 著 「失われた音を求めて」  
私のバイブルです

我が家のリビングオーディオ  
(家が狭いので、専用のオーディオルームがなくて)



シベリウス モニュメント前で妻と  
(フィンランド・ヘルシンキ＝  
シベリウス公園 2016年5月)